

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 28号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年四月
第二十八号

< 2014年 4月 >

古賀 順子

トレドの風景

パリからマドリッドは、飛行機で2時間の距離です。マドリッドからラマンチャの風景を見ながら列車で35分。70km南に位置しているのが、中世の街トレドです。

当時ヴェネチア領であったクレタ島に生まれ、トレドの地に没したエル・グレコ(1541-1614)。4月7日は画家の命日です。死後400年を記念するトレドに居合わせたのも何かの縁、エル・グレコの作品をできるだけ沢山見ることにしました。

前日、マドリッドのプラド美術館で「受胎告知」(1597-1600)「羊飼いの礼拝」(1612-1614)「キリストの洗礼」(1597-1600)など、晩年の大作群に圧倒されたばかりでした。エル・グレコがヴェネチア、ローマを経て、スペインに到着したのは1577年とされています。フィリペ2世の宮廷画家を志願するスペイン渡航でした。王の庇護は受けられなかったものの、イタリアで学んだ技術と色彩、ドラマチックな構図、画面全体に溢れる緊迫感、独特の精神性と神秘に満ちた作品はあつという間に人々の注目を集めます。

タホ河が流れる自然の要塞トレド城内に入り、最初に向かったのは、街の中央に一際高く聳える大聖堂でした。4月の眩い太陽にも拘らず、聖堂内はひんやりとしていて、聖具を収める部屋の正面に「聖衣を剥奪されるキリスト」(1577-1579)が飾ってありました。トレド大司教から受けた大きな注文です。画面中央に圧倒的な大きさで描かれた真っ赤なキリストの聖衣は、あまりにも綺麗です。その赤を囲むように、二人のマリアの青いベールと黄色い衣が美しい対比を成し、右手を胸にあてて天を仰ぐキリストの表情が劇的に描かれています。黒い陰影に縁取られた手、繊細で細長く伸びる指は、多くの

作品に見られるエル・グレコ特有の表現です。大聖堂から少し坂を降りたところにサント・トメ教会があり、エル・グレコの代表作「オルガス伯爵の埋葬」(1586)が一点だけ大きく掛けられています。世界中から集まった人たちの列は、一日中絶えることがありません。金色の正装をした二人の聖職者に抱き抱えられたオルガス伯爵の最期の場面です。参列した人々を境に地上と天上に二分されています。この作品を機に、エル・グレコは画家としての地位を確固たるものにします。

そのサント・トメ教会からさらに曲がりくねった細い道を下ると、エル・グレコの家に出ます。晩年の作品「救世主キリスト」と12使徒(1600頃)、「トレドの景観」(1601-1614)を見ることができます。なかでも「福音者聖ヨハネ」(1594-1604)は私も大好きな一枚です。作品の数の多さでは、ソコドベール広場に近いサンタ・クルス教会が圧倒的です。ビザンティン美術の影響を受けた初期作品から、マニエリスムの頂点を極める晩年までの推移を順次辿ることができます。

今回、トレドまで私たちを導いたのは一枚の絵でした。伝染病患者を隔離するために城外に建てられたタベラ病院にある「聖家族」(1590-1595)、そこに描かれた授乳の聖母の美しい顔です。かつてタベラ病院の暗い地下で出会って以来、この一枚の絵がどうなったのか確かめたいという小原先生の強い思いからでした。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教文化が共存してきたトレドの街で、異邦人画家エル・グレコはどのような思いで絵を描き続けたのだろうかと考えました。4月7日の夜、15日の満月に向う三日月が、トレドの上空で美しく静かに輝いていました。タホ河を挟んで、南の対岸の小高い丘から見るトレドの風景は幻想的で、引き込まれる魅力に捕われます。高台の冷たい空の下、人々の暮らしを仄かに照らし出す夜景は、いつまでも見飽きることはありませんでした。